

原発性ALアミロイドーシスに対する 治療法と予後の検討

研究分担者：広島赤十字・原爆病院検査部 麻奥英毅

図1. 原発性ALアミロイドーシスASCT
施行例の生存曲線

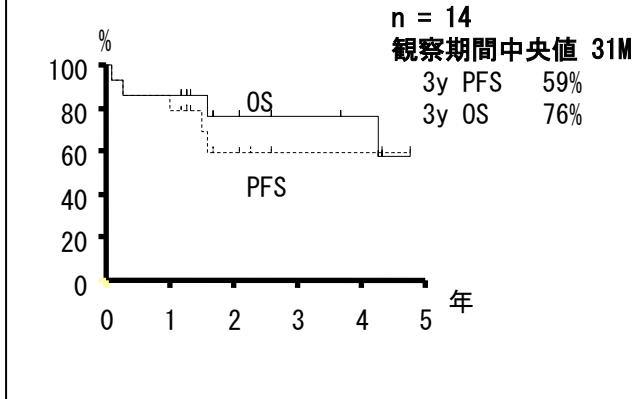


表1.

| | | | |
|-------|-----------------|-----|--------|
| MM | amyloid(-) | 161 | |
| N=210 | 無症候性amyloidosis | 49 | 23.30% |
| MGUS | amyloid(-) | 93 | |
| N=102 | 無症候性amyloidosis | 9 | 8.80% |

表2. 原発性ALアミロイドーシスの治療法と予後に関する多施設共同後方視的研究

[目的]我が国の原発性ALアミロイドーシスに対するASCTおよび非ASCT治療法の治療成績と予後影響因子を明らかにする。

[対象]2001年1月から2009年12月までに研究参加施設において治療された原発性ALアミロイドーシス患者。

[方法]多施設共同後方視的調査研究

[調査項目]

患者背景(年齢、性別、M蛋白の種類、障害臓器部位、臓器障害の評価も含め初診時検査値、初診日)

治療関連情報(治療開始日、幹細胞移植日、治療終了日)

治療内容(ASCT例では前治療の有無と内容、幹細胞採取方法と採取幹細胞数、大量化学療法の内容、非ASCT例ではその治療法)

治療効果(血液学的効果、障害臓器に対する効果)

転帰(最終確認日、生死、死因)

[解析]生物統計学的方法により奏効率、生存期間を求める。また各種パラメーターの全生存期間に与える影響について単変量解析を行い、引き続きCox比例ハザード法で多変量解析を行う。

[倫理事項]各参加施設の倫理委員会の承認と施設の長の許可を得る。また、個人情報とは連結可能匿名化される。

解 説

図1. 自家造血幹細胞移植を施行した原発性症候性ALアミロイドーシス患者の無増悪生存曲線(PFS)と全生存曲線(OS)。観察期間中央値31ヶ月で3年生存率76%である。

表1. MGUS102例中無症候性アミロイドーシス患者が9例(8.8%)存在した。そのうち長期観察4例(5年,8年,11年,11年)にはいずれも臓器障害の進行を認めていない。

表2. 原発性ALアミロイドーシスの治療法と予後に関する多施設共同後方視的研究の概要